

ザカリアの沈黙

2020年10月21日

大学教育学部

清水 禎文

聖書：ルカによる福音書 第1章5節-20節

⁵ユダヤの王ヘロデの時代、アビヤ組の祭司にザカリアという人がいた。その妻はアロン家の娘の一人で、名をエリサベトといった。⁶二人とも神の前に正しい人で、主の掟と定めをすべて守り、非のうちどころがなかった。⁷しかし、エリサベトは不妊の女だったので、彼らには、子供がなく、二人とも既に年をとっていた。⁸さて、ザカリアは自分の組が当番で、神の御前で祭司の務めをしていたとき、⁹祭司職のしきたりによってくじを引いたところ、主の聖所に入って香をたくことになった。¹⁰香をたいている間、大勢の民衆が皆外で祈っていた。¹¹すると、主の天使が現れ、香壇の右に立った。¹²ザカリアはそれを見て不安になり、恐怖の念に襲われた。¹³天使は言った。「恐れることはない。ザカリア、あなたの願いは聞き入れられた。あなたの妻エリザベトは男の子を産む。その子をヨハネと名付けなさい。¹⁴その子はあなたにとって喜びとなり、楽しみとなる。多くの人もその誕生を喜ぶ。¹⁵彼は主の御前に偉大な人になり、ぶどう酒や強い酒を飲まず、既に母の胎にいるときから聖霊に満たされていて、¹⁶イスラエルの多くの子らをその神である主のもとに立ち帰らせる。¹⁷彼はエリヤの霊と力で主に先立って行き、父の心を子に向けさせ、逆らう者に正しい人の分別を持たせて、準備のできた民を主のために用意する。」¹⁸そこで、ザカリアは天使に言った。「何によって、わたしはそれを知ることができるのでしょうか。わたしは老人ですし、妻も年をとっています。」¹⁹天使は答えた。「わたしはガブリエル、神の前に立つ者。あなたに話しかけて、この喜ばしい知らせを伝えるために遣わされたのである。²⁰あなたは口が利けなくなり、この事の起こる日まで話すことができなくなる。時が来れば実現するわたしの言葉を信じなかったからである。」

宮城学院は「神を畏れ、隣人を愛する」をスクールモットーに掲げています。このスクールモットーは、キリスト教信仰の本質とも言うべき言葉であり、建学以来、宮城学院を支えた言葉でした。

今年、本学の学院長を務められた深谷松男氏の『キリスト教学校と建学の精神』（日本キリスト教団出版局）を手にする機会がありました。先生のご著書を大学図書館から借り出したのは、しばらく前のことでした。一読して、オーソドックスなキリスト教主義学校論との印象を受けましたが、最初はそれ以上の読み方ができませんでした。その後、本の山の中に紛れ込んでしまいました。先日、本棚を整理した際に深谷先生の本を掘り当て、「もう返却しなければ」と思い、ページを繰っていると、一つひとつの文言から、深谷先生の口調、そして熱い思いがほとぼり出ていること

に気づきました。おそらく職員礼拝などの折に、じっさいに語られた言葉を基にして、文章化なされたのでしょう。文言からは、実際に語られた時の息吹と気迫を感じ取ることができました。それに魅せられて、本の中に引き込まれていきました。

この書物の中では、キリスト教主義学校にとって大切なポイントが、実に的確に指摘されています。たとえば、学校礼拝の重要性です。

キリスト教学校の学校礼拝が教会の礼拝と同じか、どう違うかが論じられることがありますが、私は、聖礼典の執行がないことその他礼拝様式の違いはあるが、「霊と真理をもって父を礼拝する」(ヨハネ 4・23)ということにおいて教会の礼拝と本質的に同じと受け止めなければならないと考えています。そこにおける説教(メッセージ)は聖書引用の人生訓やキリスト教的文化論ではなく、福音を語り、キリストを指し示すものでなければなりません。(P67)

そして

今日の若者たちは、人間性が本来ひ弱なものであることに気づき、心の孤独と不安にひそかに悩みつつ、連帯出来る魂と社会的に意義ある働きを求めています。礼拝において人間を超える永遠の実在者・神に出会う経験は、そのような若者たちにとって大きい意味を持つはずで、学校礼拝に出席した者にとって、決定的に重要なことは、神がそこにおられるということ、神の臨在です。(P68-69)

深谷先生は、学校礼拝の意義を、教会なのか、あるいは学校なのかという形式にとらわれることなく、また人生訓や文化論ではなく、まさに福音を指し示す場として位置づけておられます。臨在なされる神との出会いの場が、若者を育てることになる、との強い確信に貫かれています。

私にとって興味深かったもう一つの点は、建学の精神の位置づけでした。

建学の精神は、およそキリスト教学校においてそうですが、宮城学院の学校としての在り方とその教育の不変・不動の基礎です。福音主義キリスト教に基づく教育という本学院の建学の精神ないし教育の基本理念は、その発足当初から明確であり、120年余の歴史の中でさらに鍛錬され、固められて来たものです。不変・不動の基礎とは、この建学の精神をないがしろにするような寄付行為の変更は出来ないということであり、もし、そのようなことが行われるとすれば、それは宮城学院の否定です。(中略)繰り返して申します。宮城学院は、福音主義キリスト教に基づく教育という建学の精神を堅持する限りで、神からその存在を許されているのであり、そこに存在基盤があることを自覚している学園であります。(P86-87)

こうして、深谷先生は次のように結ばれています。「宮城学院を建て、守り、導きたもう宮城学院の真の主権者なる神が、福音主義キリスト教に基づく教育をこの学院に信託されている」(P87)と。

「神を畏れ、隣人を愛する」とのスクールモットーは、福音主義キリスト教に基づきます。それでは、福音主義キリスト教とは何でしょうか。宮城学院の寄付行為には、福音主義キリスト教に属する教派を掲げられています。これは制度としては、正しいのだと思います。しかし私は、福音主義キリスト教には、教派性を超えて、一人ひとりが聖書を通して、今も生ける主なるキリストと出会うことに基づいていると考えます。この信仰的な、根源的な事実なくして、福音主義キリスト教は成り立ちません。そして宮城学院のスクールモットーも空虚なお題目になることでしょう。決め手は、一人ひとりが聖書と出会うことなのです。

さて、本日はルカ福音書の冒頭に置かれたテキストを選びました。ルカ福音書は、ルカによる献呈の言葉を除くと、まさに今日のテキストから始まります。なぜ他でもなく、このテキストが冒頭に置かれているのか。このテキストは、イエス・キリストの降誕、来歴を示す記事であり、イエスの先駆けとなる洗礼者ヨハネの誕生の経緯を示しています。しかし、このテキストは、単なる時系列を示したテキストではなく、もう少し深い意味があるように思います。それは、神の一方的な恵みと、それに抗う人間の姿です。神からの恵みに対して、「そんなことはありえない」という人間の戸惑い、迷い、疑い、不信、そして反抗が示されています。神の言葉は、人間の理解を超えるものです。私たち人間は、神の言葉を即座に受け入れることができません。しかしこの断絶が、主なる神との対話のきっかけとなります。神と「神なき人間の惨めさ」との対話こそが、ルカ福音書の主題であることを示すテキストです。

ヘロデ王の時代、ザカリアという祭司がいました。その妻はエリサベト。エリサベトは「不妊の女」と記されています。さらに「彼らには、子供がなく、二人とも既に年をとっていた」。当時の社会的文脈においては、子孫に恵まれないということは恥ずべきことでありました。ザカリアにも、その妻エリサベトにも、心ない批判があつたに違いありません。

そのザカリアに機会が訪れます(8節)。祭司職のしきたりによってくじを引いた結果、ザカリアは聖所に入って香を焚くことになりました。すると何とも不思議な出来事が起こります。主の天使が現れたのです。そして天使はザカリアに告げます(13節)。「ザカリア、あなたの願いは聞き入れられた。あなたの妻エリサベトは男の子を産む」と。これに対して驚愕したザカリアは(18節)「何によって、わたしはそれを知ることができるのでしょうか。わたしは老人ですし、妻も年をとっています」と答えました。ザカリアは、主の天使に対し、証拠は何か、あるいは目に見える証拠はあるのか、と問うのです。ザカリアから見える確かな証拠とは、「私は老人ですし、妻も年をとって」いるという現実です。ザカリアは人間の目から見える現実にとらわれて、主の天使の告げる言葉の意味を受け止めかねたのです。

しかし、主の天使によって示された主なる神のご計画は、人間の目から見える現実を超えています。天使は、戸惑い、疑い、不信を示すザカリアに対して、御告げの根拠を示します(19節)。「わたしはガブリエル、神の前に立つ者」。確かな、信頼に値する者であることを示します。そして「この喜ばしい知らせを伝えるために遣わされたのである」。そのメッセージは信頼に足る内容であることを示します。その上で(20節)「あなたは口が利けなくなり、この事の起こる日まで話すことができなくなる。時が来れば実現するわたしの言葉を信じなかったからである」と、ザカリアにペナルティを与えます。ザカリアは約束の時まで口がきけなくなりました。沈黙することになりました。

今日のテキストを読んでいて、私が一番考えさせられたことは、ザカリアの沈黙は、彼の人間的

な戸惑い、疑い、不信に対するペナルティだったのかということです。主なる神から与えられる徴(しるし)やメッセージを、心のレベルで、精神のレベルで、そして身体のレベルで十分に受け止めるには、時間がかかります。信じられるようになるのには、時には長い時間が必要になります。

聖書の言葉は、読んですぐに理解できるわけではありません。聖書には、不可解な物語、理解を超える言葉がたくさんあるからです。そのような時に大切なのは、聖書の御言葉を心に留め、思い巡らせることです。主なる神から与えられる徴、メッセージを心に留めて、思いを巡らせる。その中で、その意味は徐々に開示されていくのです。時が至り、ふり返ったときに、目から鱗のようなものが落ち、全体像が浮かび上がるのです。その時が至るまで、徴を心の奥底で、深く思い巡らせる。主なる神のご計画が成就するのを待ち望む。これが、ザカリアの沈黙の意味だったのではないかと思います。

今日は、かつて宮城学院の学院長を務められた深谷松男先生の書物に導かれ、またルカ福音書の一節に導かれ、宮城学院のスクールモットー「神を畏れ、隣人を愛する」について考えました。このスクールモットーが、宮城学院の日々の生活の中で血となり肉となるためには何が必要か考えてみました。私たちに必要なものは、この宮城学院に集められた私たち一人ひとりが、今も生きておられ、まさに「今ここに」臨在なされるイエス・キリストに出会うことです。

では、具体的にはどうすべきでしょうか。すべてのことには時があります。イエスとの出会いも、人それぞれです。すべてのことは、神のご計画の下にあります。主なる神が、一人ひとりにもっともふさわしい形で、もっともふさわしい時に、もっともふさわしい場所で、私たち一人ひとりに語りかけてくださる。私たちは、その語りかけの意味を、心の奥底で、深く思い巡らせたいと思います。時には、ザカリアのように沈黙することも必要でしょう。そして主の御業が成就するのを待ち望む。これこそが「神を畏れる」ことの第一歩ではないでしょうか。